

鎌田東二の 霊性の京都学 69

—京都の
生態智を求めて—

スサノヲの到来とその時代

本連載六四回（二〇一四年一二月号）に、二〇一四年一〇月一八日から一二月二三日まで足利市立美術館で開催された「スサノヲの到来〜いのち・いかり・いのり」展のことを書いた。その後同展は本年一月二四日から三月二二日まで千葉県佐倉市のDIC川村記念美術館で、またこの四月一日から五月二四日まで北海道立函館美術館で巡回展として展覧されている。この間、同展が二〇一四年度の「美術館連絡協議会」の大賞を受賞したことが報道された⁽¹⁾。快挙である。画期的な出来事で、まさに「スサノヲの爆発」だといえる。事実、展覧会は評判を呼び、DIC川村記念美術館の最終日には、佐倉市のはずれの極めて不便な遠いところにあるその美術館

に一日千人近くも入場者があったが、これは記録的な事態と言っても過言ではない。

同展は、この後、六月四日から七月二日まで山形県山寺芭蕉記念館、八月八日から九月二日まで渋谷区立松濤美術館で開催される予定である。こうして、昨年一〇月から本年七月、祇園祭が行なわれる時期までの間に、スサノヲが日本列島を半周し、「日本的霊性」に大振動を与え、その覚醒を促し、列島のスピリチュアリティを開花させているのである。間違いなくそのような道を辿っている。

なぜ今、スサノヲなのか

わたしは、四月二一日に初日オープンされた北海道立函館美術館のテー

ブカットとその日の美術講演「スサノヲの時代」に向くちようど一週間前の四月三日から五日まで出雲路を旅していた。京都から岡山を経て出雲に至るルートを辿って、「巨石ハンター」こと石の聖地の写真家・須田郡司氏のギャラリー&ベジ・カフェ「まないな」(出雲市大社町杵築東真名井7)を訪れ、そこで一緒にシンポジウムをすることになっていた東京大学医学研究科助教の稲葉俊郎さん、助産師の市川きみえさん、作家の田口ランディさんと落ち合い、翌日四月四日に同ギャラリーで開催するシンポジウム「いのちとやしの聖地としての出雲」の打ち合わせをした。

「まないなイベントvol.5」と銘打たれておこなわれたこのシンポジ

ウムにおいて、わたしが「命主」と出雲と癒しのワザ」と題して講演し、続いて稲葉俊郎氏が「医療現場から見た、この世とあの世のあわい」、市川きみえ氏が「お産の現場から見た、誕生と死を統治する出雲の神々」、田口ランディ氏が「神様の言葉」について講演し、その後、須田郡司氏の司会でディスカッションを行なった。

稲葉俊郎氏はおおよそ次のように語った。——西洋医療は「病氣」から定義する。病氣から逃れようとし、病氣をマイナスとして考える。そして身体を「戦いの場」として考え、「戦争のメタファー」で捉える。敵がいるからそれを排除しようとするのが西洋医学の基本戦略である。それに対して代替医療・統合医療は「健康」から定義

していき、身体を「愛と調和の場」として捉えていく。病氣になることもマイナスとして捉えるのではなく、身体メッセージとして捉える。未来的な医療もまた病をマイナスとして捉えるのではなく、病氣の持つプラスの意味を考える。同時に、死の持つプラスの意味も考える。生きるという選択は常に小さい死の体験をしてきている。生きるという決断をして来ている。そのことをよくよく考えるべきである。頭では理解できず、体験でしか理解できないものがある。例えば愛の体験がそうだ。臨死体験もまた深い生と死の体験で、そこからどのような深い学びをしたかが問われる。そこに学び取る意思があるかどうかの問題だ。そこで体験の限定や共有や交流をもたらし、

学ぶための場を作りたい。それが「未來医療研究会」という「場」を作ることである。場作りとは学び合うことであり、そのような場と関係を作りたい。——

助産師の市川きみえ氏は、次のようなことを語った。——わたしはこの三月まで名寄市立大学の教員をしていて、つい最近、北海道の旭川の近くの上川郡東川町の大雪山系朝日岳の麓に「バース・カムイ」と名付けた助産院をオープンした。そこで人間の誕生という最大の「人事」をどう安心・安全・安寧・幸福に成就させることができるかを実践したい。誕生日や誕生時期には不思議な縁・つながり・出逢いというものがある。誕生と死の関係にも不思議なものがある。その過程で人は至高体験をするが、出産という出来事はまさにその至高体験である。そこには、生まれ変わりの問題も関係している。誕生から死に向かう人間人事の全体像をどうケアし、看取っていくことができるかが肝心要の問題である。——

そして最後に、田口ランディさんは作家として言葉の問題を掘り下げてくれた。——言葉が持つ意味と力と関係を考えたい。言葉は「膜」のような

ものであると思う。細胞膜のようにそこに「核」を内包している。意味や力を内包している。ある時、北島三郎さんの番組を見ていて、北島さんの話に心底感動した。その時、全力でお客さんに向き合い、迫り出していく「北島三郎」さんの「サブロウ」とは「スサノヲ」の「すさぶるサブロウ」であると確信した。宮沢賢治の「風の又三郎」と同様であるが、「サブロウ」こそが変革の旗手で、世界や物事を変えていくはたらきをする。そして今日、「北島国造」(第八〇代北島建孝国造)にお会いし、「北島」という言葉の意味について深く考えさせられた。出雲大社の本殿のように、どこまでも高く高く迫り出していき、「祭り」を創造していく北島三郎の中にスサノヲや出雲の力とはたらきがある。その全力投球の中に、深いところで人を、心を、魂を震わせ、動かしていく力がはたらくのである。北島三郎は凄い！そして出雲は凄い！キタジマ・サブロウは、「出雲又三郎」で、言葉の使者である。自分が作家になったのも、この出雲の神様の導きや力であると思っ

ていた。その自分の原点にもう一度立ち返って、次に向かって再出発していきたい。——



鎌田 東二
かまた とうじ

1951年、徳島県生まれ。國學院大學文学部哲学専攻卒業。同大学院文学研究科博士課程神道学専攻修了。京都大学こころの未来研究センター教授。宗教哲学・民俗学。文学博士。神道ソングライター。著書に『神と仏の精神史』春秋社、『神道のスピリチュアリティ』作品社、『聖地感覚』『神と仏の出逢う国』角川学芸出版他。
<http://homepage2.nifty.com/moon21/>

ている。——

わたしは、おおよそ次のように述べた。——「古事記」は「いのちの讃歌」である。その「いのちの讃歌」は祈りであり願いでもあるが、同時に苦悩の表出でもあり悲しみでもあり嘆きでもある。火の神カグツチを産んだ母イザナミが、黄泉の国・死の国に赴くところからその悲しみと苦悩が始まる。その母の悲と苦を全身全霊で受け止めたのが「古事記」の中でもっともやんちゃなスサノヲノミコトである。その暴力的なスサノヲが八俣大蛇を退治してクシナダヒメと結婚し、祝婚の歌を歌うところが「古事記」前半のクライマックスである。「古事記」の物語はとてもなまなましい。伝承と語り

の強度と圧力が分厚く思い深く塗り込まれている。イザナミノミコトの強力な「辱」も怨念も、それを晴らすスサノヲの晴れやかさや清々しさも、禊も祭りも神懸りも歌も芸能も戦いも、すべてが謡い込まれている。その「古事記」の「いのちのうた」が出雲神話に鳴り響いている。だから、「古事記」を読み解く鍵は「出雲神話」にある。その出雲神話は三つの命題を持つ。



北海道立函館美術館正面玄関。



平田篤胤「古道大元頭幽分属図」。

命題②出雲神格(イザナミノミコト・スサノヲノミコト・大国主神)は皆「いのち」に関わる神々である。

命題③出雲的癒しのワザとは「歌」と「琴」と「治療」である。

『延喜式』巻第十「神名」下には、「出雲郡五十八座(大一座、小五十七座)大穴持神社。杵築大社(名神大)同社坐大神后神社、同社坐伊能知比売神社、同社神魂御子神社、同社神魂伊能知奴志神社、同社神大穴持御子神社」とある。この「神魂伊能知奴志神社」が「神皇産靈神」を祭神とし、通称「命主社」と呼ばれている。このカミムスヒの神は、大国主神が八十兄神たちから焼石で焼き殺された時、蛭貝比売命と蛤貝比売命を遣わして大国主神の命を助けた神であり、まさに「いのちのヌシ」の神である。

こうして、出雲神格の祖とも言えるカミムスヒはいのちを育み助ける神である。そして、その後のイザナミノミコトは、いのちを生み出し、その子孫の大国主神による癒しのワザである。大国主神は、『古事記』では「大穴牟遲神」で、その神名は「大きな穴を持つ威力ある神」という意味であるが、その他にも「葦原色許男神・八千矛神・宇都志国玉神」の複数名を持つ「大国のヌシの神」であり、出雲的な「いのち」の完成者・成者である。

わたしはその出雲的な神々の力とはたらきをスサノヲと大国主に見るが、今回の函館美術館での「スサノヲの時代」の講演では、「スサノヲの時代」を次のように位置づけた。

- ①「いのち」の根源に立ち返っていく時代Ⅱ〈靈性の時代〉
- ②スサノヲは大海原という地球のバリエーションを象徴し体現する神であるから、スサノヲの時代とは地球的・惑星の意識が共有される時代Ⅱ〈惑星

意識・銀河系意識・宇宙意識の時代〉

③スサノヲが歌を八咫大蛇を退治し、歌を歌い、天詔琴を弾じたように、スサノヲの時代とは魔物・モンスターに立ち向かい、人々の身心変容をもたらすワザを開発・活用する時代Ⅱ〈感性・芸術の時代〉

もちろん今現在そのような時代になつていくかどうか、また今後どうなつていくかどうか不透明である。が、「スサノヲ力」の「爆発」によってそのような「スサノヲの時代」の「到来」を招来しなければならぬと覚悟し、だからこそこの「スサノヲの到来展」を開催する意味と役割があるのだ。この展覧会の特徴をわたしは次のように意味づける。

- ・この展覧会の主役(主人公)は「スサノヲ」である。
- ・したがってこの展覧会では、これが中心というものはない。すべてが「スサノヲの到来」をあかしし、表現する「依代Ⅱ作品」となっている。
- ・まさにそれは、「スサノヲ曼陀羅」とも、「スサノヲ星雲」とも言えるような、「スサノヲ・スピリット・スサノヲ・マインド」の襲来と集合である。

故に例えば著名なアーティストである岡本太郎もここではその「スサノヲ星雲」の一つの瞬きⅡ星であるばかりだ。

そのような、「スサノヲ八百万図(やおよろず)」が本展である。考古・歴史資料でもなく、現代アートでもない、それらをすべて含みつつも貫き串刺しにするその「スサノヲ的なもの」の精神史・表現誌であるところに本展の革新的な意義がある。その「スサノヲの到来展」が二〇一四年度の「美連協大賞」に輝いたのである。おそらくこの展覧会のことはいくつかから様々な形でいろいろな人々が解釈し、問題としていくだろう。間違



「スサノヲの到来」展ポスター。

インパクト、問題訴求力を持った展覧会なのだ、この展覧会は。「スサノヲの到来展」の副題となっている「いのち・いかり・いのり」が出雲神話に渦巻いている。その出雲神話の神学を掘り下げたのが国学者平田篤胤であり、その平田の「神統譜」が「古道大元頭幽分属図」として本展に展示されている。ここには五つの象限が示されている。

- ・天御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神
- ・伊邪那岐命・伊邪那美命
- ・天照大御神・須佐之男神
- ・皇美麻命・大国主命
- ・人草万物

まず、第一象限の造化三神の顕現とはたらき。そして次に第二象限のムスヒの神々の力とはたらき。そして第三象限のアマテラスとスサノヲ。太陽と月と海。アマテラスは太陽であり、スサノヲは海である。そして第四象限では、そのアマ

テラスの子孫であるスメミマすなわち天皇家が「顕明事」を、スサノヲの子孫であるオオクニヌシすなわち出雲系が「幽冥事」を司り、生と死の象限を振り分け、「分治」すなわち「国譲り」として物語化されているのだ。これはなかなか深い物語である。いろいろなことを考えさせられる。わたしは一〇歳、小学五年生の時に初めて『古事記』を読んで以来、五五年近く繰り返し『古事記』を読み続けているが、今なお謎がいっぱいで面白すぎる物語が『古事記』であると痛感する。その『古事記』には、イザナミコトスサノヲと大国主とつながる「スサノヲ星雲」が広がっている。その「スサノヲ星雲」に向かって出雲ロケットに乗って飛んでいきたいとも思っているが、今回の「スサノヲの到来展」はそのような宇宙ロケットとして爆発し飛行し未知との遭遇を啓示し続けている。

今回展示されている縄文土偶の中に、北海道の函館付近で発掘された「中空土偶」と呼ばれている土偶がある。本展では、南茅部町尾札部(現札幌市尾札部町)で発掘されたこの「中空土偶」に込められた死と再生の祈りが、スサノヲの死と再生の神話と物語

につながると数珠つなぎにされている。そのアクロバティックな数珠つなぎとも言えるような凄まじいキューレーションで革命的だ。この革命が日本を変え、日本の靈性の覚醒を促す起爆剤になると確信している。

【注】

(一)「Art Annual online」(<http://www.art-annual.jp/news-exhibition/news/46971/>)二〇一五年三月三日付に次のように報道された。「受賞」二〇一四年美連協大賞に「スサノヲの到来」美術館連絡協議会(酒井忠康理事長が優れた企画を顕彰する「美連協大賞」の二〇一四年受賞結果が公表された。今回、美連協大賞となったのは足利市立美術館を皮切りに全国五館を巡回している「スサノヲの到来」の「いのち、いのり」。同展は人と自然の関係の象徴として見いだされ、同時に和歌の始祖とも知られるスサノヲを軸に、自然や、知性を超えたものと、人間とあいたの精神の深層をあらためて見つけ、現在における芸術のあり方を捉え直そうとするもの。／「スサノヲの到来」の「いのち、いのり」巡回館および担当館者／足利市立美術館Ⅱ江尻潔、千葉・D・C川村記念美術館Ⅱ鈴木専志、赤松祐樹、北海道立函館美術館Ⅱ大下留一、山形・山寺芭蕉記念館Ⅱ相原一士、渋谷区立松涛美術館Ⅱ平塚泰三、美連協力タログ論文賞「優秀論文賞(個人表彰)「美連協展部門」スサノヲの到来」の「いのち、いのり」【論文名】スサノヲの到来(江尻潔、足利市立美術館)

参考文献
鎌田東二「日本の平和思想―「国譲り」問題を考える」(鎌田東二企画、編)講座スピリチュアル学第3巻スピリチュアリティと平和)BNP、二〇一五年